

先秦巴国の構造（梗概）

谷 口 満

はじめに

巴国の歴史に関する基本的文献史料である『華陽国志』『巴志』は、“七国が王を称するに及んで、巴もまた王を称した”と記していて、戦国七国と同じように巴国の首長も王を名乗ったと伝えている。また張儀が巴国を滅ぼしたことを記した部分にも、王を捕獲したとあって、最後の“巴王”が秦に捕獲されたことを伝えている。この記述は、当然のことながら他の戦国諸国と同様、戦国巴国も“一人の巴王”によって統率されていたことを伝えているのである。

このしごく当たり前のことを冒頭にかかげたのは、これがほんとうに当たり前のことなのかどうか、少し気にかかる資料が存在するからに他ならない。それはいわゆる巴系青銅器に見られる王字紋の存在である。たとえば、高文・高成剛編『巴蜀銅印』（上海書店出版社・1998年）に収録されている例をみると、四川省博物館所蔵の戦国銅印5枚、重慶市博物館所蔵の戦国銅印3枚、榮経巖道古城博物館所蔵の戦国銅印16枚などに王字紋を認めることができる。王字紋銅印を保有しているからといって、その保有者が王号を称していたとは限らないが、ただその可能性は皆無とはいかないであろう。そして、この24枚の銅印はどう考えても一人の保有にかかるものではなく、複数の保有者を想定しなければならないから、もし保有者が王号を称していたとすると、複数の王号称号者が想定されてくるのである。

戦国巴国に複数の王号称号者が存在していたと考えれば、そのなかのとくに有力な一人が巴国全体の王として君臨していたとしても、なにせ王号を称する者が他に相当数いる以上、その君主権はそれほど絶対的なものではないことになる。いやよしんば王字紋銅印の保有者が王号を称していなかったと考えても、王字紋銅印を保有してはばからない者が相当数いること自体が、ただ一人の王号称号者の君主権がそれほど絶対的なものではないことを示してはいないであろうか。

王字紋青銅器の出土は、このように戦国巴国の王号称号者が複数存在した可能性を残存させ、そうでなくても、少なくとも巴王の君主権があまり強いものでなかった可能性を残存させているのである。

戦国巴国に王号を称した者が複数存在したかどうかというような重要な問題を、王字紋青銅器といったような不安定な史料で云々するのは、少し無節操にすぎるかも知れない。しかし、無節操すぎるとの非難を覚悟であえて推測を提示したのにはそれなりの理由があるのであって、それはこういった一種無謀な推測を試みたくなるほどに、戦国巴国の構造

についての史料が絶対的に欠乏しているからである。史料が乏しければ乏しいほど、よけいに無謀な推測でもしてみたくなるというものではなかろうか。戦国巴国の構造についての史料がいかに欠乏しているかは、東隣りにある楚国のその豊富さと比較すれば一目瞭然であって、彼我の相違はあまりにも大きいのである。戦国巴国についてすらこうであるから、春秋や西周のそれとなるとほとんど無いに等しいということになってしまうであろう。

もっともこれに対しては、徐中舒・蒙文通・鄧少琴・任乃強・童恩正・李紹明といった先学たちの研究があるではないかという注意が出されるにちがいない。さすがにこれだけの大家たちとなると、その論証は博引旁証をきわめており、巴国の歴史に関する情報はほとんどすべてが出揃っているといってよい。ただ、それにはやはり“ほとんど”という限定がつくのであって、巴族の族源や移動経路、巴国領域の時代的変遷といった歴史地理的情報がきわめて豊富なのに比べれば、巴国の構造に関する情報は皆無に等しく、この欠落があるがために、すべてが出揃っているといえない状況にあるのである。それは、行くところ可ならざるはなき先学たちでも、史料の絶対的欠乏には手の打ちようがなかったことを示しているであろう。

このように巴国の構造を復原することはきわめて困難であるというのが、史料上の現状なのであるが、にもかかわらず以下にあえてその復原作業を試みてみようというのであるから、やはりはっきりした理由を示しておかねばならない。第一の理由は、近年における考古資料の急増である。史料が絶対的に欠乏しているといっても、それはもっぱら伝世の文献史料についてのことであり、考古資料の場合は増えることがあっても現状にとどまるということがない。もちろん巴国の構造を復原するのに十分な数量が集積されるにはかなりの年月がかかるであろうが、三峡大ダムの建造にともなう考古工作の進展をへた現在の状況は、望ましいといってよい段階に到っていると思うのである。故童恩正教授らが考古資料を積極的に導入しはじめていた当時に比べて、その増加には飛躍的なものがあるといってよいであろう。第二の理由は、交通事情の改善などによって四川東部や湖北西部や湖南西北部の山間地に入ることが格段に容易になり、巴族の人々が活躍した現場に立って、往時を追体験することが可能になったことである。もちろん中国の研究者は従前から活発に現地調査を試みていたはずであるが、今ほどに容易でなかったろうし、ましてや異国の訪問者が現地に入ることなど、想像すらできないことであったといわねばならない。本稿の執筆を思い立った最大の理由は、実はここ十年あまりの間に十数回にわたって四川東部・湖北西部・湖南西北部を現地調査した、その成果を巴国の構造の復原に役立てることが可能であると判断したことにあるのである。そこで得られたものは地勢や風土の特殊性だけではない、巴国時代のものではないけれども、近世以降の遺跡や遺物や伝説が、まるで巴国時代のそれらが再現してきたかのように残存していて、巴国の構造に思いをはせることを可能にしてくれているのである。

なお考古資料といった場合、発現しているものの大半は戦国時代のものであり、したがっ

てそれらを使って復原されてくる巴国の構造は当然のことながら戦国時代のそれということになるが、ただなかには春秋以前に遡る考古資料も含まれるであろうし、それに戦国巴国の構造はそれ以前の構造とそれほど違ったものではないであろうから、この点を考慮して、論題を「戦国巴国の構造」ではなく「先秦巴国の構造」としたことをあらかじめことわっておきたい。

一 小巴国

まず巴族の人々が集住した集落遺跡を取り上げたいと思うが、ここが確かに集落であったと判定されるような遺跡は周知のように今のところきわめて少ない。衣・食・住の痕跡は、まとまっては発見されにくいのであろう。したがって集落遺跡以外の遺跡から集落の存在を確認しなければならないことになり、その以外の遺跡とはいうまでもなく墓葬遺跡と祭祀遺跡ということになる。一定の規模をもった墓区が存在していることは、その付近に集落が存在していたことを示しているはずであって、涪陵小田溪・雲陽李家壩・開県余家壩・宣漢羅家壩の墓区などがその代表例であろう。祭祀遺跡の近くにもその祭祀を奉ずる人々が居住する集落が存在したはずであって、有名な長陽香炉石遺跡や、発掘はされていないけれども、同じく長陽の武落鍾離山遺跡がその代表例である。

こういった墓区遺跡や祭祀遺跡の分布情況、それはつまり巴族集落の分布情況なわけであるが、その集落と集落の間隔には一つの原則があるように思われる。それはどうやら1日の行程で到達できそうな距離なのである。もちろんこれとはかけ離れた例もあるし、そもそもすべての例を検討することは不可能であろうが、しかしこの一つの原則の存在には誰も気がつくのではなからうか。試みに雲陽李家壩と開県余家壩を例にとると、長江と小河の合流点である雲陽県城青龍嘴鎮から小河を30キロメートルほど遡って李家壩遺跡、そこからさらに40キロメートルほど遡って余家壩遺跡である。小田溪遺跡は長江と烏江の合流点である涪陵市区から烏江を30キロメートルほど遡った地点にあり、そこからやはり30キロメートルほどで武隆県城巷口鎮であるが、ここからも巴文化の独有器虎鈕罇子が出土していて巴族の集落が存在した可能性が高い。清江下流では、長陽県城龍舟坪鎮から30キロメートルほど清江を遡って武落鍾離山、そこから40キロメートルほどで香炉石遺跡である。巴国当時の舟運能力がどれほどのものであったかは明らかにしがたいけれども、ここにかかげた間隔は、1日で航行到達可能とみて大過ないであろう。当たり前のことではあるが、舟運には一定の間隔をおいた河港が必ず必要であり、これらの集落はそこに発達したものと考えられるのである。

なお、巴族の代表的な遺跡としてすぐに浮かび上がってくるのが、すべてこのような長江支流の河面に面した沿岸遺跡であるということは、全体的にいても巴族の集落は陸路よりも水路でつながる地点に存在したものが多くを示してはいないであろうか。そうであるとするとその事情は、陸路よりも長江の支流あるいはその支流を利用した水路が、交通路として優勢であったと思われる四川東部・湖北西部・湖南西北部の地勢情況を、十

分に反映していることになる。もちろん陸路でつながる集落であっても、その集落間隔が1日行程に対応する距離であったろうことは想像に難くない。

次に問題にしたいのは香炉石遺跡や武落鍾離山遺跡の性格である。というのも、小稿ではすでにはこれを“祭祀遺跡”とよんで、神々を祀る祭祀場の遺構であるとみなしているのであるが、そうではなく集落の遺構であるとみる意見があるからである。しかし、どう考えても香炉石遺跡や武落鍾離山遺跡を集落の遺構であるとみることはできないであろう。清江を見下ろすように切り立った岩山で、とうてい人が住むことはできないからである。香炉石遺跡を“夷城”であるとする意見は、この意見は現地地の研究者のなかで特に有力な意見なのであるが⁽¹⁾、この意味において再吟味する必要があると思う。

巴族の中心的な種族は、代々廩君とよばれる酋長を族長とする一族で、その発祥地は武落鍾離山であったというのが通説である。初代の廩君である務相は武落鍾離山から清江を遡って塩水に至り、そこで塩水の女神を打ち破って清江中流域を平定し、夷城というところで他の種族をおさえて酋長の位に即いたという。武落鍾離山から清江の上流40キロメートルあまりにあること、近くに塩水の後身と思われる塩池温泉があること、近くに廩君務相についての伝説がいくつか残っていること、こういったことから香炉石遺跡を夷城にあてて意見が出されているのは、しごく自然のことであるといえよう。ただ問題は、香炉石遺跡が夷城であることが確かであるとしても、夷城とはいうもののそこは人々の居住する集落ではなく、神々を祀る祭祀場としての宗教的聖地であったと思われることである。清江の流れに臨んで屹立する神秘的な様子は、宗教的聖地としてのそれにこそまことにふさわしい。清江中流を支配下におさめるということは、おそらくこの聖地で執り行われる祭祀権を掌握するということであり、それが、ここで廩君務相が酋長の位に即いたという伝説となって後世に残ったものにちがいない。したがって、廩君一族やその他の人々が常時居住する集落は香炉石遺跡から少し離れたところにあったはずであり、周辺の地勢を考えると、香炉石遺跡の上流500メートルあまりにある漁峡口鎮一帯がその有力な候補地であろう。武落鍾離山もそうであって、やはり清江の流れに臨んで屹立するその神秘的な様子は、ここが清江下流の宗教的聖地であったことをうかがわせるに十分なものがある。廩君巴族の発祥地であるとはいっても、そこは彼らが神々を祀った祭祀場であって、常時の居住地としての集落は、おそらく付近の都鎮灣鎮一帯にあったと思われるのである。ちなみに廩君務相が夷城に到来したことを記した『晋書』「載記」李特の条をみると、原文は次のようになっている。

階陞相乗、廩君登之、岸上有平石方一丈、長五尺、廩君休其上、投策計算、皆著石焉、因立城其旁而居之。

“階陞相乗”といい“岸上”といい、香炉石遺跡の様子を彷彿とさせるものがあるが、廩君務相たちが居住地する城壁集落は、“其旁”という表示のとおり、その岩山から少し離れたところに城かれたのである。

このように神々を祀る祭祀場が居住集落の中になく、少し離れた場所に位置している例

は、かつての巴族分布地域における近世以降の遺跡にも見られるようである。たとえば湖南西北部湘西自治州永順に残存する老司城はその例である。この遺跡は、宋代以降湘西自治州北部に代々土司王として君臨した彭氏の拠点、いわゆる土司城の遺構が今日まで残存しているもので、酉水の支流猛洞河のそのまた支流の人里離れた奥地に静かなたたずまいをもって存在している。そのうちの祖師殿とよばれる宗教施設は、居住集落遺跡から老司河の北岸を徒歩で30分ほど下がったところに存在しているのである。しかもそこは北岸の急斜面が河面にせまる険要な地勢で、きわめて荘厳な様相を呈している。屹立する岩山ではないけれども、その神秘的な雰囲気は香炉石遺跡や武落鍾離山のそれと通ずるものがあるであろう。

巴文化の独有器虎鈕罇于の出土事情も、こう考えてくると、そのいくつかについては説明がつくかも知れない。虎鈕罇于の出土状況にはさまざまなものがあるのであるが、墓葬から出土するものは少なく、人里離れた山間から無造作に放置された状態で出土するものが多い。たとえば15件の虎鈕罇于が一カ所から出土した湖南石門県熊家崗の場合、その出土地点は石門県城から武陵山地へ向かう小山にあり、なぜこのような辺鄙な場所から虎鈕罇于が出土しているのか、精巧・豪華なそれが15件も出土しただけに、よけいにいぶかしく思われる。しかし、現場に立ってみるとこの疑問は氷解するであろう。そこは小さいけれども神秘的な岩山と湖沼を前にしており、宗教的聖地にふさわしい雰囲気をかもし出している。ここで山神・湖神・族神などの祭祀が行われ、使用された祭器である虎鈕罇于がそのままそこに埋蔵されたに違いないのである。一度に15件の虎鈕罇于が使用され、それがそのまま埋蔵されたのであるから、よほど盛大な祭祀であったろうし、よほど重要な祭祀場であったことになる。この熊家崗の場合、定期的に祭祀の行われる恒常的な祭祀場であったのか、一度の大祭のためだけにとくに選ばれた祭祀場なのかははっきりしないが、ともかくここが居住集落の中であったとは考えられない。熊家崗の例から想定されるように、虎鈕罇于の多くが辺鄙な山間から孤立的に出土しているのは、その出土地点が居住集落から離れた祭祀場であり、祭祀ののちにそこに埋蔵された例が多いためであると見てよいと思う。

居住集落から離れた所にあるこういった祭祀場は、宗教的聖地であると同時に、また今一つの機能を合わせもっていた場合が多いと思われる。それは軍事防衛拠点としてのそれである。つまりいったん敵の攻撃を受けた際には、住民はこの宗教的聖地に閉じこもってここを最後の防衛点としたのであり、陥落すれば彼ら自身と彼らの神々の双方が完全に滅亡することを意味する。宗教的聖地のほとんどが難攻不落かと思われるほどの険要な地勢に立っているのは、この機能を発揮させるためであることは言うまでもないであろう。清朝のものではあるが、清江の上流利川市大水井鎮に残る李氏宗祠の配置はこれに一つの実例を提供してくれるはずである。利川市街から318国道を北上して、20キロメートルほどで小道へ右折し、柏楊鎮をへて大水井鎮に到着する。香炉石や鍾離山ほどの秘境ではないが、人跡まれな山間であることはまちがいない、李氏のような大族がここでどうやって

生計をたてていたのか、不思議に思われるほどの辺地である。そこには百メートルほど離れて二つの大建築が並んでおり、西側は常時数百人の生活が可能であったという李氏邸宅、東側は李氏の祖先を祀る宗廟建築に他ならない。邸宅の周囲には何も無いが、宗廟の周囲には周長 500 メートルほどの堅固な城壁が張り巡らされており、城壁要塞にふさわしい構えをもっている。敵の攻撃を受ければ、この要塞に立てこもって自らと自らの祖先を守御したのであり、事実、民国時代に四川の軍閥がここを攻撃した時には、陥落させるのにかなりの時間を要したという。

いったい先秦時代の都市といえば、黄河中流・下流域などの列国国都がかならず思い浮かんでくるが、それらの都市は一般に内城外郭式の構造をもっていた。城壁都市のなかに内城があり、そこが宗廟などの置かれた聖地であって、最後の防御地点であったのである。内城に立てこもって敵の城門攻撃に抵抗する列国国都の様相は、たとえば『春秋左氏伝』などにしばしば登場するところである。そうすると、居住集落と祭祀場＝最終防御地点が離れている巴族の例は、特異な例といえそうである。もちろん居住集落のなかに祭祀場が存在した例もあったであろうし、そもそも祀られる神々の種類によって祭祀場の位置に違いがあったことも考えねばならないが、香炉石遺跡や鍾離山遺跡など、巴族の場合は祭祀場＝最終防御地点が居住集落から離れている例が多いようであり、一つの特色といつてよいであろう。神々が往来するにふさわしい神秘的な様相をもち、攻撃が容易でない険要な岩山や山崖が点々と存在する地勢が、この特色を生み出している主要な理由の一つであることはいうまでもない。

一定規模の居住集落と、付近に存在する祭祀場の機能と最終防御地点の機能をあわせもった宗教的聖地、これが巴国の最小基本単位であり、もちろん付近には住民の生活を支えるまとまった農耕地や狩猟場や漁撈場が存在したことも考えねばならない。それに付近に重要な物資の生産地をかかえていた場合もあったと思われ、塩・丹砂・漆などがその代表的な生産物である。先にあげたように、香炉石遺跡の場合、約 500 メートル上流に住居集落の後身とおぼしき漁峡口鎮、そのもう少し上流にかつての産塩地である塩池温泉があり、宗教的聖地・住居集落・産塩地が離れながらも隣接する恰好の事例とすることができよう。巴国の東隣に展開した楚国の起源を探索した張正明氏は、西周時代の都城である丹陽は現在の湖北省南漳県城にあり、縮酒という宗教儀式を行う祭祀場はその西方荆山山間の薛坪にあって、さらに丹陽の近くに産塩地があったと推測している。隣国の例ではあるけれども一つの類例とすることができるであろう。

このような最小単位としての拠点が、おもに長江支流の沿岸に、およそ一日行程の間隔をおいて散在していたのであるが、その拠点内部の政治構造といったものはまったく知られない。ただ、基本的には孤立的な地勢であるから、それぞれの拠点の政治的独立性は相対的に強いものであったろうし、墓葬から出土する華麗な青銅器を見れば、そこに宗教的儀器としての青銅礼器を独占する政治的支配者が存在したことはまちがいない。しかもなかには、小田溪遺跡の墓葬のように王字紋をもった青銅器を出している拠点もあるのであ

るから（双王鉦）、王号を称していたかどうかはともかく、そこには一種の王権とよべる政治権力が存在していた可能性を示している。こういった状況を考慮すれば、これらの拠点それぞれを“小巴国”とよんでも、さほどの間違いはないと思う。

二 中巴国

小巴国と小巴国の間にはどのような関係が存在したであろうか？これが次の問題である。交易・通婚・文化や習俗の共有、それにある種の政治的従属関係も想定されるであろう。しかし残念なことに、その実態を復原することは資料的にきわめて困難である。ことに考古学資料はこの場合、今のところほとんど役に立たない。そこでいきおい後世の伝説とか近代以降の水運の状況とかを間接的な資料として使用せざるをえないのであるが、それとてもちろん十分なものでないことは、いうまでもないであろう。したがって以下の議論は限りなく想像に近いものであることを、あらかじめことわっておかねばならない。

いくつかの小巴国が、交易・通婚・文化や習俗の共有、政治的従属関係によってまとまりを形成する場合、それはどれほどの範囲になるであろうか。二つだけの小巴国がまとまるごく小さい範囲から、多数の小巴国がまとまる大きな範囲までその広さはさまざまであろうし、そもそもまとまりとは何かという基準の違いによって、想定される範囲にも違いが生じるであろうが、たとえば、廩君務相が武落鍾離山から出発して清江を航行した範囲がその一つの例であろう。それは廩君務相や、その化身である白虎、その後身である向王天子などについての伝説が今なお残っている範囲とほぼ重なるはずであり、清江中流の塩池温泉・漁峡口鎮から資丘鎮・都鎮湾鎮をへて、下流の長陽県城龍舟坪鎮にいたる清江流域長陽段がこれに相当する。塩池温泉と龍舟坪鎮を往来するには、当時の舟運能力で1日30キロメートルと考えると、およそ5、6日であるから、交易や通婚の範囲としては適当であるといえよう。白虎崇拜と向王天子崇拜が分布しているこの範囲の類例としては、近世以降のものではあるけれども、清江流域恩施自治州段に残る譚母余氏伝説と湖南湘西自治州に残る八部大王伝説が参考になる。

譚母余氏伝説とは、湖北省西部巴東県清太坪郷に本拠をもっていたとされる、大姓譚一族の祖先伝説で、清太坪郷橋河村に残る「譚母余老太夫人墓碑」によると次のようなものである。⁽³⁾

太祖夫人余氏は元末の人である。伝えによると、元末の乱の際、蜀楚の地域は騷擾ことにはなはだしく、太夫人は太祖に従って山中に難を避けたが、寇族の暴略は猖獗をきわめ、とうとう離ればなれになってしまった。太夫人は本村（清太坪郷）の嚮洞に身を隠したものの、外に出ようとすると峭壁万仞、人はもちろん鳥すらも近づけない難所であり、太夫人は天を仰いで号泣してしまった。すると突然大きな鷹が現れて、身を伏せて人のことばを話し、怖くはない、目を閉じて背中に乗りなさいというとともに、“譚氏は必ず子孫が繁栄することになっているのです。ですからあなたは死ぬはずがないのですよ”と宣託し、そこでついに背中にまたがった。しばらく目を閉じて

いると、すでに身体は地上に着いていた。後の人たちは、太夫人が飛び下りたその場所を“落婆坪”と名づけた。事実を後世に残そうと考えたのである。その後太夫人は一人の男の子を生んだ。諱は天飛である。天飛公には八人の子があり、長子は桂寅、次は桂伝、次は桂芳、次は桂旺、次は桂枝、次は桂甫、次は桂林、次は桂海で、八人はそれぞれ八坪に分居した。太夫人は孫の面倒をみながらゆったりと余生を過ごし、太平の時代になって亡くなり、本村の錦鷄水の北に葬られた。我々は桂芳公の後裔であり、住んでいるのは太夫人の墓に近いところである。今年八十一才になった族長が、墓が荒廃し祖先の伝承が失われてしまうのをおそれて、率先して提案し、ここに墓を修繕し、碑文を刻んで太夫人の奇跡を伝えて、盛徳の永遠であることを記すことにしたのである（明故太祖妣譚母余老太夫人之神道碑・道光三年清明前一日立、意識）。

またこの墓碑の隣には譚天飛の墓碑があり、その内容はこうなっている。

始祖天飛公は太祖母余太夫人の子である。元末に生まれ、長じては孝行をもって有名となった。八人の子があり、それぞれ八坪に分居した。長子は桂寅で苜蓿坪に居り、次は桂伝で大天坪に居り、次は桂芳で水流坪に居り、次は桂旺で双社坪に居り、次は桂枝で家社坪に居り、次は桂甫で四川の上陽坪に居り、次は桂林で長陽の磨石坪に居り、次は桂海で落婆坪に居った。云々。（道光三年清明前一日立）。

ここにみえる余太夫人と大きな鷹の伝説は、恩施自治州に今も流伝している“鷹公公与蛇婆婆”の創世神話にきわめてよく似ているという。余太夫人に蛇の神格は見えないけれども、太夫人が大鷹に助けられたという伝説が、この創世神話から派生したものである可能性は高いであろう。それはともかく、譚氏八部の人たちにとっては鷹神こそが最高の崇拜対象であり、始祖天飛公は“天飛”というその名の通り、鷹神の化身であると見なされていたはずである。

譚氏八部の分布は、四川の上陽坪と長陽の磨石坪を除けば、巴東県南域から清江上流域にかけての地域に限定されるようであって、そうすると鷹神崇拜をもつ六部が分布するこの範囲は、白虎崇拜と向王天子崇拜が分布する清江流域長陽段の範囲に対応していないであろうか。両者の地理的大きさはほぼ同じであるし、ある崇拜を共有するという意味において、質的に同じ広がりをもった範囲であると考えられるのである。

そして、譚氏八部のこの伝説からは湖南湘西自治州に残存している八部大王伝説が、必然的に想起⁽⁴⁾こされてくる。八部大王伝説とは土家族に伝わる祖先伝説の一つで、その八部のそれぞれの祖先は兄弟で、順に次のような名前をもっていたという。

熬朝河舍 西梯佬 西呵佬 里都 蘇都 拉烏米 此也夫蘇也冲 接也夫也名黒列也
残念ながらこれらの名義はまったく不明であるし、八部の分居地もほとんど知られないが、八部の本部は龍山県干溪郷伯納村であると伝えられていること、保靖県拔茅郷水壩洞に近年まで八部大王廟が残存していたこと、龍山県馬蹄郷馬蹄寨の人たちは自分たちを二男西梯佬の子孫であると信じ、同じく甘溪郷の人々は三男西呵佬の子孫であると信じていること、こういったことからして、酉水の中流からその支流の洗車河流域一帯に分布していた

ことはまちがいない。八人の子供たちは龍の乳で育ったとか、あるいは虎の乳で育ったとかいう伝説もあわせて残っており、八部大王崇拜と龍崇拜・虎崇拜を共有する八部が湘西自治州の酉水中流一帯に分散していたのである。八部が分布するこの範囲も、やはり清江流域長陽段の範囲に対応しているとみてよいであろう。

譚氏八部と八部大王八部の場合、八部の祖先はすべて父母を同じくする兄弟であり、したがって八部の人々が、相互に血縁のつながる同祖集団であると信じていたのに対して、清江流域長陽段の白虎崇拜や向王天子崇拜を奉ずる人々は、すべてが廩君一族と同祖意識をもっていたわけではなく、その意味においては伝説の質において若干の相違があるかも知れないし、近世以降の世族についての伝説と巴国時代についての伝説という点でも若干の質の相違を考えなければならないかも知れない。しかし、動物神である虎であるとか龍であるとか、人格神である向王天子であるとか八部大王であるとか、ある神格の崇拜を共有することによって地域的なまとまりを構成していたことにはかわりはない。

四川東部・湖北西部・湖南西北部の山間地区には、坪とか壩とか寨とか峒とか呼ばれる集落が無数に散在しているが、近世以降、そのような集落のいくつかの一つのまとまりを形成する場合、共通の崇拜神をもつことがまとまりを維持する一つの紐帯となっていたのであり、譚母余氏伝説や八部大王伝説はそこに生まれた伝説である。それは、先秦時代において小巴国がいくつか集まって地域的まとまりを形成する場合に、同じようにそういった共通の崇拜を紐帯としていたことの類例とすることができるのであって、清江流域長陽段の白虎崇拜と向王天子崇拜がその実例というわけなのである。

まとまりを形成する際の精神的紐帯ということになれば、このように崇拜神の共有という事情を何とか推測できるのであるが、この地域的まとまりを誰がどのように管理していたか、つまり政治的構造がどうであったかとなると、推測すら困難である。それでも無理に推測を重ねるとすると、やはり祭祀の管理という事情がまず想定されるであろう。清江流域長陽段の場合、廩君一族の聖地である武落鍾離山が第一の祭祀場であることはいうまでもない。廩君一族が長陽段を統合していく過程とは、武落鍾離山で祭祀されていた一族の神々の崇拜を、各小巴国にいわば強制する一方、各小巴国の本来の崇拜神を一族本来の崇拜神のなかに取り込んでいく過程だったはずである。たとえば先にあげた廩君務相と塩水女神との伝説においては、務相が女神を打ち破ったというのが当初のモチーフであったものの、のちには両神が結婚して清江を守る夫婦神となったというモチーフも生じたようである。向王天子（務相の後身）と徳濟娘娘（女神の後身）の夫婦神がそれであり、武落鍾離山の山頂には今もこの夫婦神が祀られている。これは廩君一族の祭祀が塩水一帯に強制されつつも、その女神崇拜が廩君一族の祭祀に取り込まれた結果を示しているとみてよい。武落鍾離山の祭祀を中心に、各小国の祭祀が一つの祭祀体系に整理されているこの状況は、いいかえれば、廩君一族を中心に、各巴小国の間に一個の政治連合体が形成されている状況でもあるはずであろう。

次に想定される事情は航運の管理である。武落鍾離山の山頂や保靖県拔茅郷水壩洞の八

部大王廟に立てば、すぐさま了解されることであるが、清江と酉水を航運する船舶を一望のもとに見下ろすことのできる絶好の位置にある。どのような小さな舟も、その目から逃れることはできない。ということは、航運するどの舟からも仰ぎ見ることのできる聖地であるということであり、通過する舟は必ず權をとめて航行の安全を祈願したにちがいない。とすれば、そこに航運を管理するなんらかの機関がおかれて、一種の関税の徴収、船神祭祀の主催、船舶航運の管制といった機能をになった可能性はきわめて高い。それは清江流域長陽段のいわば水運管理センターの役割を果たしていたであろう。

さらにもう一点、想像をたくましくすれば、この清江流域長陽段という範囲は一つの通婚圏を形成していたのではなからうか。廩君務相と塩水女神の婚姻が武落鍾離山の廩君一族と塩池温泉一族の婚姻を反映しているとするれば、その距離は約 40 キロメートルであり、当時の通婚範囲としてありえないことではない。もし武落鍾離山から 30 キロメートルほど下ると、今の県城龍舟坪鎮であるが、そこも通婚範囲として考えられる距離である。通婚の繰り返しは、距離を隔てて姻族を生み出すことになるのであり、一つの地域的まとまりの形成に有効な紐帯として働くことになるのである。

さて、小巴国よる地域的なまとまりの内容を、清江流域長陽段を一つのモデルに設定して、譚氏八部や八部大王八部の分布範囲を類例にとりつつ、以上のように想定してきたのには実は大きな理由がある。それはこの小巴国のまとまりの範囲が、近世以降のいわゆる土司の支配領域とどうしても重なってみえてくるからである。湖北西部から湖南西北部にかけての地域には、周知のように宋・元・明・清と各地に地元の有力者が割拠し、王朝から宣撫使・宣慰使などの称号を与えられて、半ば独立政権を保持していた。譚氏、田氏、向氏、彭氏などがその代表的な著姓である。容美宣撫司・施南宣撫司・唐崖長官司・永順宣慰司などの土司城は今なおその遺構が残存しており、往時の繁栄を偲ぶことができるが、興味深いのは、容美土司城のように県城のなかに存在したものもあるもの（鶴峰県城）、その多くは県城から離れた山間にあり、武落鍾離山遺跡や香炉石遺跡や、あるいは小田溪遺跡・李家壩遺跡・余壩家遺跡・羅家壩遺跡などの巴族遺跡と、きわめてよく似た地勢に拠るものが多いことである。つまり、土司城はその地勢上の位置環境からいえば、有力な小巴国の後身といえそうなのである。そして、土司城は点在するいくつかの集落を配下におさめて、その範囲における生産・流通・崇拜を管理していたのであるから、土司の支配圏は必然的に、有力な小巴国のもとにいくつかの小巴国が管理される、小巴国の地域的まとまりを彷彿とさせることになる。実際に現地の土司城遺跡を訪問して、近世の往時に想いをはせ、さらに先秦の往時に想いをはせれば、誰もがこのようなイメージを想いうかべるにちがいない。

ともかくこうして複数の小巴国による地域的なまとまりを想定することができるのであり、このまとまりは“中巴国”とよぶことが可能である。そして、中巴国のなかには当然後世の土司に相当する主権者が存在しなければならず、清江長陽段におけるそれが廩君一族の族長、つまり代々の廩君であることはいままでもないであろう。

三 大巴国

中巴国は清江の流域、小河の流域、烏江の流域、酉水流域などの河川流域を中心に、四川東部・湖北西部・湖南西北部の各地にある広がりをもって散在していたはずであるが、次に問題となるのは、当然のことながらこの中巴国と大巴国がどのように結合されていたかという点である。

巴族の居住範囲が最盛時どれほどの広さに広がっていたかについては、『華陽国志』『巴志』の記述などによってある程度の復原が可能であるし、何よりも巴文化遺跡や巴文化遺物の出土分布によって、かなり正確に復原することが可能なはずである。そのいくつかの復原結果の詳細を整理する余裕はないが、四川東部・湖北西部・湖南西北部のほぼ全域と漢中地区の一部・貴州東北部の一部をあわせた広大な地域であることはまちがいない。もちろん、時代によってこの範囲に変動が生じたことはいうまでもないが、先秦時代の最盛期には、この範囲にまで拡大していたと考えて大きな間違いはないであろう。

ところでこの巴族の居住範囲については、どうしても解決しなければならない一つの重要な問題がある。それは巴族の進出が成都地区にまで及んでいたかどうかという問題である。たとえば四川省博物館所蔵の広漢出土と伝えられる戦国“三星虎紋鉦”は、どうみても巴族の典型器物であり、もし広漢出土が確かであるとするなら、これは巴族が戦国期に成都地区にまでに到達していた重要な証拠となる（この器物の年代については異説があるらしいが、小田溪戦国墓出土の例の双王字紋鉦とまったく同じ器形であり、したがって戦国のものであることはまちがいない）。またあるいは、冒頭にあげた榮経巖道故城博物館所蔵の16枚の戦国王字紋銅印についても、来歴不明のものが多いものの、榮経周辺出土のものが多いことは確実であって、そうするとこれらも巴族が戦国期に成都地区へ到達していたことの証拠となるはずである。それにこういった出土遺物とともに、一つの有名な伝説が残存していて、この想定⁽⁶⁾の確かなことを強く傍証づけてくれている。それはもちろん例の鼈靈伝説である。

鼈靈とは周知のように、成都地区に興替した最後の王朝開明王朝の始祖であり、実際には鼈の形をもった水神であった。それは王朝を開いた開明一族の最高崇拝神であり、それがいつしか鼈靈という実在の人物がいたかの如き伝承となって、始祖伝説に登場しているのである。

この鼈靈一族は本来から成都地区に居住していた一族ではなく、もともとは湖北西部三峡地区に居住していた巴族の一支で、それが長江を遡りさらに岷江を遡って成都地区に到り、望帝に代わって新たに開明王朝を建てたのである。鼈靈は洪水を治めた功績によって望帝にとって代ったと伝えられているから、鼈靈一族は治水工事の能力に長じた一種の職能集団であった可能性が高いであろうし、そうだとすると彼らの最高崇拝神が水中動物の鼈神であるというのは、容易に合点のいく事情でなければならない。鼈靈一族が成都地区に到った時期、開明王朝を建てた時期についてははっきりしないが、おそらく春秋中期

ごろに到達して、その後ほどなくして王朝を開き、戦国時代に最盛期を迎えていたことはまちがいないであろう。

このようにして、巴族はどう遅くみつもっても、少なくとも戦国時代には成都地区に進出していたのであり、したがって先に想定した範囲には、四川西部成都地区を加えなければならないのである。

ではこの広い範囲にいくつか分布していたはず中巴国は、相互にどのような関係を保っていたのであろうか。ことこの問題に至ると推測の手だてほとんどなくなってしまうのであるが、一つの考古遺物だけはなんとかその史料的价值を發揮することができるであろうと考えて、その推測の可能性を追求してみることにしたいと思う。

その一つの考古遺物というのは、いうまでもなく虎鈕罇子や虎紋青銅兵器などの、虎崇拜を象徴する巴族青銅器である。この青銅器が出土しているということは、そこに巴族の虎崇拜が存在していたということであるから、その分布状況を見れば虎崇拜の広がりがわかることになるが、それはすでにのべた巴族居住範囲のほぼ全域に及んでいる。つまり、それぞれの中巴国は虎崇拜を共通の信仰としてもっていたことになる。虎崇拜という精神的な紐帯、これだけがただ一つ推測される中巴国相互をつないでいる紐帯なのである。

そして、この精神的紐帯の、紐帯としての機能のありかたについて、きわめて興味深い

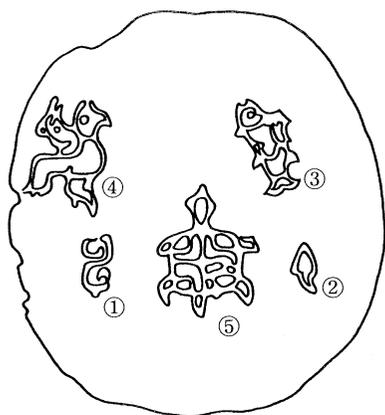


図1

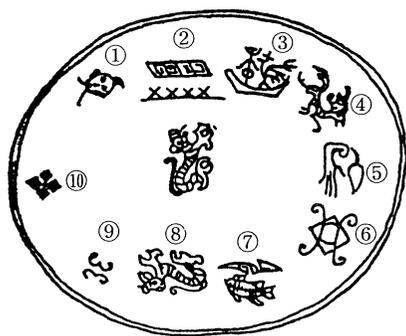


図2

一つの出土器物が存在する。それが、確実に開明王朝の器物であると判定される、成都市三洞橋出土の戦国青銅勺である。そこには次のような5つの図案が刻まれているのであるが(図1)、
は巴文化青銅器に常見する紋飾であり、これだけでこの青銅器の持ち主が巴族の一種であることが判明するばかりか、中央には鼈とおぼしき紋飾が鎮座して(), どうみてもこれが鼈神を奉ずる鼈霊一族のものであることも判明するのである。他ならぬ成都市内から出土しているという前提がある以上、これが成都地区に進出して開明王朝を建てた鼈霊一族のものであることはいうまでもなく、またその鼈霊一族が巴族の一支であったことを強く証拠づけていることになる。

さて
が巴系青銅器に常見するというのは、その代表的な例としてたとえば万県出土戦国虎鈕罇子の次のような盤部図案を念頭においているからであり(図2。出土地点不明。四川大学博物館所蔵)、この両者の相違が真ん中の鼈紋と虎鈕にあることは一目瞭然であろう。図1の
、図2の

を見くらべれば、両者がともに巴文化の青銅器である

ことは容易に了解できるのであるが、真ん中に虎鈕あるいは虎鈕の下にさらに虎図案のある巴系青銅器を見慣れている者にとっては、図1の真ん中になぜ虎ならぬ鼈が配置されているのか、にわかには理解しがたいにちがいない。実はこのにわかには理解しがたいところにこそ、三洞橋出土青銅勺の史的価値があるのである。

この二つの巴系青銅器の併在は、巴族の人々にとっては何ら理解に苦しむところがなかったはずでなければならない。そうでなければ、両者が戦国の同時代に併立して作られることはありえないであろう。それはつまり、彼らの意識にあっては、虎が鼈に姿を変えたまでのことであって、何ら不思議はなかったからにちがいない。鼈霊一族が巴族の一支であった以上、彼らの最高崇拜物は当然虎であったことになるが、ただこの一族は治水工事能力にたけた集団として、鼈神崇拜をももっていたはずである。彼らが湖北西部 三峡地区に居住していたころには、中央に虎鈕や虎紋を配置した青銅器を保持していたかも知れないが、長江・岷江を上って成都地区に到り、その能力による功績によって王朝を建てることになったからには、真ん中が陸の王者虎では彼らの真面目を表示することができない。そこで虎は水神である鼈に姿を変えることになったのである。ある崇拜物が時と場所に応じて姿を変えるというのは古代の信仰意識においてしばしば見られる現象であり、“融即”などと表示され、中国の文献史料では一般的に“化”と表記される。そしてもちろん、このことは成都地区に到った鼈霊一族から虎崇拜がなくなってしまったことを意味しているのではない。彼らにとって今は虎が鼈に形を変えているにすぎず、いや実は鼈は虎そのものでもあるのである。彼らの虎崇拜を示していると思われる三星虎紋鉦が成都地区から出土しているのはそのためであり、開明王朝の崇拜神から派生したと思われる開明獸や神陸吾などとよばれる神格が、九尾虎・九首虎などと伝えられていて、虎神の形状をとっているのもそのためであろう。

三洞橋出土の青銅勺図案は、このように虎と鼈の融即現象という、中巴国と中巴国をつなぐ虎崇拜のありかたについてのきわめて重要な情報を提供してくれるのであるが、実はこれをきっかけに虎と他の複数の神格との融即現象もが想定されてくるのである。図2の虎鈕罍于盤部図案を仔細にながめて見ると、各図案の配列にはある意味がこめられていることが了解される。まず注意しなければならないのは、 から までの10図案のなかに虎が含まれており()、しかもそれが他の9図案とまったく同列の位置におかれていることである。(の虎図案が廩君一族あるいはその支派を象徴していることはまちがいないであろう)。この配置は、虎と他の9神格との間には本来何の優劣もなく、10神格すべてが同等の神格であったことを示しているであろう。そして の虎図案とは別に真ん中に虎鈕とその真下に虎図案があるのであるから、その虎鈕と虎図案はいわば10図案の代表として設置されているかのようなのである。例えば適切ではないかも知れないが、10図案はあるスポーツチームの10人の選手で、 の虎選手がキャプテンであり、行進する場合はフラッグを掲げて10人の先頭に立たねばならない、そのフラッグが真ん中の虎鈕と虎図案であり、彼はキャプテンであるけれども、資格はあくまで選手の一人にすぎない、というところで

はなかろうか。もし周囲に の虎図案が配置されていないとしたら、それは虎が9図案の神格とは同格ではなく、絶対的な優位にたっていることを示していることになるはずであり、虎は9選手に命令を下す、選手ではないいわば監督ということになる。この点、同心円上にならぶ複数図案の一つに虎図案が配置されている、この万県出土虎鈕罇于盤部はきわめて貴重な資料であるといわねばならない。実は、数多い虎鈕罇于盤部図案の事例のなかで、同心円上の図案に虎図案が見られるのは、管見の限りこの一例だけであって、他の事例にあっては省略されているのである。巴族の人々にとっては、虎崇拜をめぐる以上の事情は何も説明する必要のない自明の事実であり、重複を避けるという単純な理由から一般的には省略に従ったのであろうが、ただ、そうなるとも万県出土虎鈕罇于盤部がなければ、その自明の事実を想定できなかつたわけであり、文字通り貴重な一器ということができよう。

虎と龍の融即現象から始めて、万県出土虎鈕罇于盤部図案の意味をこのように分析してみると、9個の神格はそれぞれ虎と融即関係にあったのではなかろうかという推測がどうしても浮かび上がってくる。それは虎選手以外の選手がキャプテンになって、虎鈕・虎図案のチームフラッグを掲げるようなものであって、ありえないことではないであろう。こういった推測以上の想定を提出するには、やはりそれなりの理由があるのであり、それは重慶市文物考古研究所が所蔵している、奉節県城永安鎮出土の戦国青銅器蓋が存在するからである。正式の報告はまだ未公表で、ルールにしたがって図版や写真を示すことはできないが、研究所のご好意で整理前の現物と整理後の写真を見せていただいている。そこでは中央に虎鈕を配し、周囲の同心円上に8頭の虎を並べるといふ、珍奇きわまりない状態がとられているのである（いくつかがつぶれていて正確に数えることができないが、8頭であろう）。虎意匠、時代、出土地点からして、これが巴族の器物であることは間違いなく、とすれば同じ巴族の器物である万県出土虎鈕罇于盤部図案の同心円上の図案が、ここではすべて虎に姿を変えていることになる。虎鈕罇于盤部図案の神格が虎に融即している事例をここに見ることができるであろう。こうして万県出土虎鈕罇于盤部の9図案は、時と場所によって虎に融即した可能性がきわめて高いことになる。

繰り返しになるが、虎意匠をもった虎鈕罇于盤部や虎紋青銅器は中巴国の範囲をはるかにこえて、四川東部西部・湖北西部・湖南西北部の広い範囲に広がっている。それは、複数の中巴国が虎崇拜でつながられて、一つの広大な文化圏を形成していたことを意味しているのであるが、その虎崇拜のありかたは、中巴国やあるいは小巴国における他の崇拜物を排斥するというものではなく、その間に優劣をつけないいわば相互認定的なものであったのではなかろうか。三洞橋出土の青銅勺や万県出土の虎鈕罇于盤部に見られる、虎と他の神格との融即現象は、そういった精神的なありかたを反映していると考えてよいと思う。

すでに小巴国、中巴国と設定してきたのであるから、この広大な巴文化圏は“大巴国”の領域であるということができよう。ただこの大巴国には、一つの王権が全域を中央集権的に支配するといったような政治構造を見いだすことができないし、そうであるばかりか、

むしろ互いに互いの崇拜を認定し、しかも融即しあうような協同的關係が想定されるのである。崇拜とか信仰とかいった精神的な紐帯によって、ゆるやかに結合された広域圏、これが大巴国の様相ではなからうか。

おわりに

中国古代における王朝や国家の構造という、いわゆる賦と税の負担制度、封建制や郡県制、国家祭祀と地方祭祀といったことが必ず問題にされるが、巴国の場合それらの内容を復原することはほとんど不可能である。それは史料が絶対的に欠乏しているからであるが、史料が絶対的に欠乏しているということは、そもそも記述するに足る内容が存在しなかったからではなからうか。その可能性はきわめて高いであろう。

巴国の場合、小巴国の独立性はかなり強かったと考えられる。秦漢以降の西南地区の状況を記した史料は、多数の“君長”が存在していたことをしばしば伝えているが、この君長はその拠って立つ地勢からいっても、おそらく小巴国首長の後身であったはずである。彼らは“君長”とよばれるように独立王国の君主の如き地位を保持していたのであり、それはまた小巴国の首長のありようをかなりの程度反映しているであろう。

小巴国が複数結合される場合、政治的には中巴国の範囲が限度ではなかつたろうか。それは、中巴国の後身といってよい近世以降の土司政権が、ほぼ同じ領域をもってそれぞれが政治的に独立し、それ以上の広域的な政治圏を形成することがほとんどなかったことにも示されている。軍事的徴発権といった政治的権力が及ぶ範囲は、中巴国の範囲を出ることはなかつたと思われるのであり、それには地勢が影響していることはいうまでもない。

小巴国や中巴国の独立性の強さを考えると、その首長層のなかに王号を称する者が複数存在した可能性は、けっして低くはないと思うが、どうであろうか。

したがって、大巴国という設定も可能ではあるが、だからといって強い政治的まとまりもった広域な国家圏が想定されるわけではない。張儀が巴国を滅ぼしたというのも、おそらく有力な一つの中巴国を滅ぼしたというのが実際であり、そもそも他の中巴国との間に政治的つながりはほとんどなかつたのであるから、これでもってすぐに秦の支配が巴族・巴文化の全域に及んだわけではない。依然として独立性の強い中巴国や小巴国があちこちに存在していたはずであり、秦漢以降の王朝がここに郡県制的な支配を実質的にしくことが困難であったとされることからしても、その独立性は長く維持されたに相違ない。

思うに殷・周・秦・楚など、そういった国家を形成せしめた集団も、もともとは小巴国とか中巴国のような地域的集団であったはずである。その拠っていた地勢が辺境地帯のそれであることもきわめて似ている。とすれば、小巴国や中巴国の内容を復原することは、殷・周・秦・楚などの主権集団の本来の性格を復原するに当たって、一つの有効なモデルを提供することになるはずである。一方、殷・周・秦・楚などのそのような当初の集団は、小巴国や中巴国の段階にとどまることなく、黄河流域や長江流域に進出して、大巴国の領域をはるかにこえた大領域国家を形成した。そこには、そういった大領域国家を形成しえ

なかった巴国諸集団との対比が生じるはずであり、なぜ可能でありなぜ不可能であったかという問題の解明を通して、地域集団の古代的発展過程を考察することが可能になる。この場合にも、小巴国・中巴国・大巴国の構造が有効な資料として機能するであろうことはいうまでもない。

小稿は、2009年11月7、8日の両日、重慶師範大学で開催された「三峡考古発現与巴文化學術研討会」において「我們怎樣地復原巴国的結構？」と題して口頭発表した内容を、口述原稿をもとに整理したものである。口述原稿の3倍ほどの字数となっているが、それでも腹案を概略的に提示したものにすぎない。論題に「(梗概)」という付題をつけたのはそのためであり、註を最小限にとどめたのも梗概であることを考慮したためであることを、ここにことわっておきたい。

註

- (1) 王善才主編『中国早期巴文化：長陽香炉石遺址発掘与研究』（1997年）。
- (2) (5) 長陽土家族自治县民族文化研究会・長陽土家族自治县民族事務委員会合編『廩君的伝説』（1995年）。
- (3) 以下の碑文については王曉寧編『恩施自治州碑刻大観』（恩施州民族研究叢書・2004年・新華出版社）。
- (4) 以下の八部大王伝説については張子偉『湖南省永順県和平郷双鳳村土家族的毛古斯儀式』（1996年）
- (5) 谷口満『鼈霊伝説の背景 長江上中流域における巴系民族の動向』（『東北大学東洋史論集』十輯）。

図版出典

- 図1 吳怡「記成都出土幾件彫有図騰紋飾的青銅器」（『成都文物』1986 3）。
- 図2 李純一『中国上古出土樂器綜論』（1996年・文物出版社）。

初校の段階で、重慶師範大学楊華教授から、奉節永安鎮出土戦国青銅器蓋の写真が、添付ファイルで送られてきた。許可をえてここに転載しておく。